

説教ワンポイント

そこで、主は教えられた

マタイ五・一〜三

イザヤ三〇・一八、一九

「(心の)貧しい者は幸いである。」と言われても、本当の貧しさを知っている者はにわかには賛成できません。幸いな訳ないじゃない！ 生活の基本的な物資に事欠き、子どもにまで我慢をしいて、どこが幸い？

このように山上の垂訓のイエスの言葉はどれも激しく、極端に思えます。そう簡単に実現できない、いや多分、ほとんど無理なことをたたみかけるように言われても…。よい言葉も実現不可能なら意味がない…。私もそう思ってきました。でも、今日読んでいて、ある部分に気づきました。それら厳しい言葉の前、二節に渡って書かれている事。「イエスは群衆を見て山に登り、腰を下ろ

すと、弟子たちが近寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた」

山に登り、腰を下ろし…。場所や姿勢がここで関係あるの？ 「口を開いて」教えられた…。当たり前では？ それら一挙手一投足をあえて書く。読む私たちの目の前にイエスの姿が見えるよう…。実はその描写こそ山上の垂訓のもっとも大切な部分かもしれないと思うのです。

貧しさの中でも、悲しんでいても、迫害されている時でも、私たちが幸いと言ってくださいる方がいる。最後まで共にいるといってくださいるその方が幸いを約束して下さいました。幸いの根拠はここにあります。私たちが自分の力や考えで幸いになることはありません。

「もはや泣くことはない。主はあなたの呼ぶ声に答えて、必ず恵みを与えられる。主がそれを聞いて、ただちに答えてくださる」

(イザヤ三〇・一九)

(二〇一七年二月二日礼拝より、津田記す)